

横井小楠の中国観についての一考察

陳 衛 平

これまでの小楠研究は数多くの優れた業績を上げたが、小楠の中国観についてあまり触れていないようである。今回の横井小楠の中国観につき以下のように限定して発表する。第一、当時の中国（横井小楠では「満清」、「清土」などと呼ぶが）に関する小楠の考え、特に西洋侵略下における中国の対応の仕方について小楠の考え。第二、同時代の儒学者特に吉田松陰の中国観と比較し、小楠の中国観の特色とその形成の思想的背景を考察する。

一、横井小楠の中国観の展開

横井小楠（一八〇九—一八六九）は幕末期「独創的な儒教的思想家」である。当時第一の世界地理書」といわれる「海国図志」（清の魏源 編著）との出会いをきっかけとして、小楠は安政二年（一八五五）について完全な開国論者となり、思想家として重要な一歩を踏み出したというのが大方の見方である。以下、その小楠の思想形成期以後の著作から年代順に彼の中国観を見てみよう。

1、安政三年（一八五六）十二月二十一日付き村田氏寿宛て書簡

この「村田氏寿宛て書簡」は小楠思想研究において重要な文献の一つである。すでに研究者は多くの角度からとらえ引用している。結論を先にすれば、この書簡は小楠の中国観を探る重要な手掛りとも見てもよいだろう。書簡の中、小楠は当時のロシア人の中国観を紹介する形で以下のように述べている

（ロシア人今から約三十五、六年前に中国に留学生を送った。留学生たちは、）

「専ら聖經を研究致し、書経・詩経・論語之三部を其国之文字に翻訳致し、国都に持帰。」ところが、「其大学校之詮議に懸け候処、第一規模之広大なる、経綸之明齊なる、修己治人、政教一致なる所に深く驚 致し、三千年之古如此之道明なる堯舜の聖徳に於いては、誠に奇異の思をなし、其の奉る天主之教と全く符節を合候と論決致候。然処、後世之漢人如何成故に如何之大道之本意を誤り、唯唯書を読み文詩を作候を學問と心得候哉。後世治道衰廢人道乱候は、全堯舜孔子之大道を失ひ候故にて有之候へば、当今の漢人深く此処を

省察致し、無用之文学を相止、三代之大道再び其土に明なるに於ては、其国之中興掌を返すが如し。」¹⁾ということであった。

引用文はちよつと長いが、これによつて小楠の中国觀をつぶさに見ることが出来る。魯西亞(ロシア)人の中国觀を紹介したものはいえ、実はここから小楠自身の中国觀を読み取ることができよう。小楠の考えは三つほどに分けられる。

第一、原初型としての儒学—小楠の用語は「三代之道」—と当時中国社会の儒学學問を峻別した。小楠は当時の中国の儒学を「大道之本意を誤り、唯唯書を読み詩を作候を學問と心得」と性格づけ、厳しく批判する一方、儒学の原点である「堯舜孔孟」の學問の精神、すなわち「三代之道」を高く評価している。さらに、「三代之道」の特徴を「規模之広大、経綸之明齊、修己治人、政教一致」と簡潔に概括した。用語自体が依然儒学的なものであることはいうまでもないが、その内実はかなり更新されているといえよう。一例であるが、従来の儒学において「華(あるいは夏)夷の別」という考え方が、従来の儒学において、「華」の儒学を普及させることと「夷」の人々に持たせるということである。これによつて、「夷」も「華」と同じような立派な徳治国家になり、あるいは「華」の一部になる。その発想自体は武力で征服する意図が薄いといえる一方、「夷」に対して「華」は絶対的優位に立つことが明らかである。この考えの实效性がどれほどあるがどうか別にして、少なくとも、大原則としてこうでなければならぬ、と歴代の儒学者たちは考えている。しかしながら、小楠に言わせるなら、「三代之道」が「天主教」と「全

く符節を合」わせていることも有り得るのである。さらに、後に小楠は「華夷彼此差別無く皆同じ人類」の考えに至つたことを含めて見ると、これは儒学の優位性を相対化したと言わざるを得ない。そう言えるならば、小楠の「三代之道」は原初型の儒学をそのまま掲げたものというより、東アジア地域の民族的国家的危機の背景下、小楠が儒学に対して再考して生まれた成果と言つてよい。

第二に、小楠は当時の中国の衰退した原因を分析した。儒学思想家として、小楠は「堯、舜、孔子之大道を失ひ」を最も重要な原因として挙げた。人々は「唯書を読み文詩を作候を學問と心得」、「其の国総て政道を失ひ世々内乱止不申、追々他国より取られる候も、人道之明なり不申故にて、深く痛心に存候由」ということである。小楠から見れば、問題は儒学學習の自体にあるでなく、儒学本来の根本的目標と進取的な精神を喪失したところである。

第三に、小楠は中国の前途について決して絶望的ではない。彼は「当今の漢人深く此処を省察致し、無用之文学を相止、三代之大道再び其土に明なるに於ては、其国之中興掌を返すが如し。」と述べ、熱意をこめて「当今の漢人」つまり当時の中国人に注文している。以後の小楠の言動に見られるように、これは小楠の一貫した姿勢出会つた。また「其国之中興掌を返すが如し。」という言葉から、小楠の見通しはかなり楽観的であることが分かる。

さらに、注目すべき点は小楠の中国情勢に対する認識と日本についての認識とが分析方法において一致するところにある。つまり、「三代之道」を基準として、両国の成敗の原因を考えているのである。この点について小楠はどれぐらいの自覚性をしていたがどうか

は別にして、実際に彼は東アジア儒学圏という超国家的立場に立ち、共有的価値観から、政局分析を展開していたのである。それゆえ、小楠が同じ言葉で、ほぼ同じ結論と解決の原則を出したのも不思議ではない。例えば、前述した「中興」という言葉を、当時の中国だけでなく、日本将来の展望についても使用し、同じような樂觀的見通しを示した。⁽²⁾ ここには一つ重要な視点が秘められているのではないかと筆者は考える。即ち、日中両国、あるいは原則的にどの国もお互いに排斥的ではなく平行的に再生、発展することができるということである。

2、「国是三論」以後の論著における中国観

一八六〇年著した「国是三論」は、小楠思想の集大成である。一八六五年に行われた「沼山閑話」とその前の年にできた「沼山対話」とは小楠思想の最高峰と言われた。小楠は思想の成熟期を迎え、「堯舜孔孟三代之学」と名づけられた学問の体系もほぼ完成した。「三代之学」とは、「宋の大儒」つまり近世儒学の空理空論を排し、儒学の原点である「堯舜孔孟」の実践的学問の精神に立脚しながら、「西洋器械」の導入から「西洋のような」公論、「公議」など近代議会制度に近いものを実行すべしと唱えた学問であり、「華夷の差別なく万国一体」の理念を掲げて、それを「四海（全世界）」に普及させることを最高目標とするのである。いわば一種の新理学である。

「国是三論」の中で当時の日本の鎖国政策の弊害を批判する際、小楠は中国の例を引いて、以下のように述べている。

「宜敷き支那に鑑るべし。(中略)今の満清は古の所謂北より興り、明を滅亡して中国に入り邦俗をも一変せしかど、康熙・乾隆の諸帝賢徳有て政治を明かにし、文教を一新し克く太平を致すといへ共、開国以来百数十年道光・咸豊に至つて昇平の久敷、其弊驕傲文弱に流れ、海外諸国の往往理を弱め智を開き、仁を施し義を崇び、国富み兵強く、諸夏の亡きが如くならざるを知らず。待つに昔日の夷狄を以てし、蔑視する事禽獸に等しきになり、道光の末年、阿片の乱により大に英国の為に挫折せられ、不得止和親の条約を立るといへ共、朝野の気習驕惰悔慢にして、約を守るに堅からず、数変数約毎に彼が大義に屈し兵威に怖、好港沃土を折て其違約の罪を償ひ、其屈辱を極むれ共、朝廷無人優遊無斷、曾て懲愆の念なく、又和戦の議を決せず、唯偷安を私するのみならず猶約に背ひて英使を濫殺する暴慢の行あり。仍之英国怒らせることを得ず。今歳四月仏国と兵を併せ、大挙して其不信不義の罪を討ち、七月遂に天津の河口を破り進んで北京に迫れる故、清王大に恐て轆鞞に遁逃するの風聞あり。支那たとへ英国の好意によつて帝国の号を存するとも、国体の隕墮如斯なれば、後帝号を専らすることを得べからず。支那は日本と唇齒の国なり、其覆轍目前に在て齒己に寒し。坐視傍觀の秋にあらず。」(国是三論・国富論)⁽³⁾

「沼山閑話」に小楠はこう言い残した。

「清土の学上等人と雖も程朱の流か王陽明の流にして、性命心法の外三代治道を講究する学はこれ無と見たり、其政に預る人は俗流

当世の務を為す迄の人と見えたり、故に西洋新製の器械等採用せず。依然として故轍を守りれり。西洋人頻に卑下する由なり。⁴

今日の通説で以上の発言をみてみると、当時の第二次アヘン戦争に関する見方の中に適切でない個所がある。しかし、これらはそれほど重要な意味を持たない。

「国是三論」以後の中国論は以前の関連する議論から継承した一面もあるし、推進した一面もあるように思う。どこまでもいつまでも「三代之道」（あるいは「三代之治道」）に立脚しながら、時代の動きを思想面で分析するのが小楠の姿勢である。当時の中国は西洋人によって軽蔑された根本的原因は「西洋器械を採用せず」にあるではなく、「三代之治道を講究する学」がないからである。その中、小楠は初めて明確な形で朱子学や陽明学を批判した。同時に、十分ではないが小楠は歴史の展開という縦軸から清の衰退する原因を追求しようと努めている。

最後に、小楠は「支那は日本と唇齒の国なり、其覆轍目前に在て齒己に寒し。坐視傍觀の秋にあらざ」と言い、当時の中国の危局をみながら、「内憂外患」もますます深刻になっている祖国の日本に対して嚴重警告している。

二、小楠の中国観と当時他の儒学思想家たちのそのの相違について

幕末期には多くのユニークな儒学思想家が登場した。彼らは隣国中国（勿論朝鮮も）に大きな関心を持っていた。しかし、観察方法

から結論に至るまで、多くの人と小楠との間には明らかに隔たりがある。以下は吉田松陰を例として考えてみよう。⁵

松陰はこう言ったことがある。

「癸丑（嘉永六年）甲寅（安政元年）は一大機会なりしに、乃ち坐して之れを失ふ。然れども事己に往けり。今の計を為さんには、和親して以て二虜を制し、間に乘じて国を富まして兵を強くし、蝦夷を墾き、満州を奪ひ、朝鮮を來たし、南地を併せ、然る後に米を抗ぎ歐を折かば、則ち事克たざるはなし。⁶」

偶然と言えば偶然だが、前述した村田氏寿は安政三年小楠の手紙を受け取ったほぼ一年後、安政四年十一月二十八日に松陰から一通の手紙を受け取った。その中で、松陰は言う。

魯（ロシア）と墨（アメリカ）と結んだ条約を尊重しながら、「其間を以て、国力を養い取り易き朝鮮満州支那を切り従へ、交易にて魯墨に失ふ所は土地にて朝満（朝鮮、中国東北部を指す―筆者注）に償ふべし。」さらに、松陰は「朝鮮を賣めて、質を納れ、貢を奉ずること古の盛時の如くならしめ、北は満州の地を割き、南は台湾、ルソン諸島を収め、進取の勢いを示すべき」ことを提言した。⁷

「開国」にあたって、「魯墨」に失ったものを「朝鮮満州」などから取り入れるというのが松陰の論理であった。

小楠は中国と日本に対して「中興」を期待している。それは当然

西洋への抵抗を意味している。小楠は「沼山閑話」に西洋列強のアジア侵攻を「暴虐無理」と厳しく批判し、その行動自体は「割拠見の気習」によるものと論理的に分析した。

しかし、より注目すべきなのは、小楠が抵抗を呼びかけると共に、「洋人の万国一体四海兄弟」の説を認め、自分の国際観を示したところである。

「華夷彼此の差別なく皆同じ人類にて候えば互に交通致交易の大利を通じる候が今日自然の理勢と被存候」⁽⁸⁾

言うまでもなく、小楠の国際観は「三代之道」に基づいたものであり、西洋抵抗の決意と万国一体の論理と共存するものである。小楠の考えがもつと明確な形で現したのは次の言葉である。

「道は天下の道なり。我国の、外国のと云う事はない。道の有外夷といへとも中国なり、無道に成らば、我国・支那と云へとも共即ち夷なり。初より中国と云、夷と云事はない。」⁽⁹⁾そして、「天地の気運を乗じ万国の事情に随ひ、公共の道を以て天下を経綸」する。⁽¹⁰⁾

恰もこれに対する反対意見を述べるように、松陰はこう言う。

「然るに、一老先生の説く如く、道は天地の間一理にして、其大原は天より出づ、我れと人との差なく、我が国と他の国の別なしと

云ひて、皇国の君臣を漢土の君臣と同一に論ずるは、余が万々服せざる所なり」⁽¹¹⁾

小楠も松陰も「道」という概念を強調したが、その内容は随分異なることが読み取れよう。小楠は一種の文化相對主義とも言える考えを示したのを対して、松陰の言葉に独善的な発想があると云わざるを得ない。小楠の考えは残念ながら当時において広く受け入れられなかったように見える。しかしながら、今日的視点で見ると、先見性のある思考が歴然としている。

もちろん松陰は個人として魅力のある人物と言えるだけではない、幕末維新期に大きな貢献をしたことも紛れもない事実である。しかしながら、少なくとも、松陰の対外観は受け入れ難い一面がある。ところが、小楠の場合はこれとは異なる。また、小楠から、明治期の中江兆民らを経て、大正期の吉野作造などへと続く思想の流れは、厳しい時代の中にあるながら、アジア諸国に対して理解を示すものであり、このような流れは日本において絶たれることはなかった。

結論に代えて

1、小楠の中国観は一貫した考え方を持っている

それはほうかでもない「三代之道」である。中国の失敗の原因を分析する場合も、失敗が日本への教訓を強調する場合も、東アジアの今後の見通しを論じる場合も、いろいろ具体的議論の根底に思想分析の物差しとして、「三代之道」の言葉が必ず登場する。十九世

紀五十年代から六十年代にかけて、中国は国勢衰退する一方であって、日本など近隣国の従来の中国観は変わる土壌が出来たのである。

しかし、小楠の中国観は基本的に変わらなかった。これが「三代之道」の信念によるものと、筆者は考える。だから、逆に言うと、小楠の中国観を見る場合、単なる小楠思想の側面に光を当てるとのみならず、小楠の「三代之道」の独自性と先見性を理解する必要がある。また、国家あるいは民族の独立の問題を儒学の革新問題と一緒に捉える姿勢が、思想家小楠の興味深いところである。

2、小楠の中国観からみる「三代之道」の思考の革新性

小楠は生涯を通して中国に対して同情的で、理解を持った認識を持っていた。ただし、小楠の中国観は決して単に同情的であったのではない。小楠の清朝廷の失政に対する批判はなかなか厳しいものであった。さらに、彼の批判は思想面と共に実務面に及ぶものもあった。小楠から見れば、「三代之道」が樹立されてないから、みな程朱理学の性命心性の学に陥ってしまうことになる。それは必然的に西洋器械の導入を拒絶する反応を示した。それならば、いわゆる中国の「中興」は精神面で「三代之道」を高く掲げると同時に、実務面での「富国強兵」をも積極的に推進しなければならない。ところで、小楠は消極的に「東方道徳」を保持することに反対する。「三代之道」は儒学の自己革新、自己反省の要求を含むものであり、またその革新、反省の成果でもある。小楠はこの点に関して佐久間象山を鋭く批判した。さらに、「三代之道」は「天地公共之道」であるので、民族抵抗の理念を含みながら、一國一地域を超える「華夷彼此の差別なく皆同じ人類」という思想の境地に到達した。これは

近代的国際観の樹立と直ちにつながるとは言えないが、「華夷意識」の終焉を告げる先駆的意味があったことは確かであった。結局、中国観の相違が小楠と他の同時代の儒学思想家とを区別するものがあった。

注釈

(1) 『横井小楠関係史料(一)』二四四―二四五頁。東京大学出版会 昭和五十二年覆刻 下同。

(2) 例えば村田氏寿宛書簡に「和漢にて名君賢諸相と称候位にては中興の治は出来申」『横井小楠関係史料(一)』二四二頁。

(3) 『横井小楠関係史料(一)』四〇―四一頁。また、同じく「国是三論・強兵論」で小楠はこう記している

「五大洲の亜細亜の中の支那は東面海に臨みたる巨邦にして、文物早く開らけ、稲、麦、稷を初、人類の生活において足らざる事なく、其他智巧、技芸、百貨、玩好に及ぶまで、皆内地に取て欠事なくして豊穰なれば、上朝廷より下庶民に至るまで誇大 傲の風習あつて、海外の諸国来て貿易する准ぜとも、往て事物を求めに意なく、又人に取て智識を開らく事を知らず、是支那の兵力衰弱にして、諸州の凌辱を受ける所以なり。」

(4) 『横井小楠関係史料(一)』九二六頁。

(5) 佐久間象山と比較した方がいいかもしれない。しかし、松陰は終生に象山を師として仰いだことや小楠と一度実際に合ったことがあるなど考えると、結局松陰を選んだ。

また、小楠の国際観について他の思想家と比較して見ること

も有益であると思う。例えば、幕末維新期において小楠以外、松陰などと違う見方を持つ人物が存在しないわけではない。小楠の親友でもある勝海舟はまさにその一人であった。一八九四年日清戦争後、勝海舟は新聞にこのような談話を発表した。

「二戦三戦の勝を以て支那を軽蔑するは、支那を知るものにあらず。」(一八九五年三月六日付「毎日新聞」)「世間では百戦百勝などと喜んで居れど、支那では何とも感じはしないのだ。

そこになると、あの国はなかなか大きなところがある。支那人は天子が代わろうが、敵国が来たり国を取ろうが、ああ天子が代わったのか、ああ日本が来て我國を取ろうのか、風の吹いた程も感ぜぬ。感ぜぬも道理だ、一の帝国滅びて一の帝国興るも、誰が来て国を取ろうも、一体の社会は依然として旧態を存して居るなり。(一八九五年六月五日付「国民新聞」) 以上は参照 勝海舟「水川清話」『勝海舟全集・二十一』二五五―二五八頁 一九七三年 講談社)

おそらく海舟は当時の政界で日清戦争に反対した唯一の高官であろう。彼の中国認識は当時の多くの政治家をかなり超えたものであると考える。しかし、上記の言葉をよく考えるなら、中国問題を深く理解した上の発言とは言い難い。海舟は明治二十八年(一八九五)に上述の発言をした。これは小楠の死去二十六年あとのことである。海舟の考えはかつての親友の小楠を超えるものでない。

(6) 『野獄山文稿』『吉田松陰全集』第二卷三三〇頁 一九七三年 大和書房 下同。

(7) 芳賀登「脱亜論と朝鮮蔑視論の形成」『比較文化論』所収 一九九二年 教育出版センター。

(8) 『横井小楠関係史料(二)』九〇六―九〇七頁。

(9) 源了圓「横井小楠」参照『日本の思想家(上)』一九七五年 朝日新聞社。

(10) 『横井小楠関係史料(一)』三十二頁。

(11) 『講孟余話』『吉田松陰全集』第三卷 四二―四三頁。

小楠と松陰の思想の相違について別の機会に譲るが、ここで一言付ける。二人の思想形成の軌跡を辿ってみる必要があると思う。二人は少年期に同じく儒学学習からスタートした。自分の思想が確立するにつれ、松陰はますます儒学の説から離脱し、ついに「皇国の道悉く神代に原づく、則ち此の巻は臣子の宜しく信奉すべき所なり」という論法に立つようになった。(『講孟余話』『吉田松陰全集』第三卷) 一方、小楠はいよいよ儒学の原点へ転回し、最終に「堯舜三代之道」と名付けた徹底した儒学合理主義を樹立した。このような異なる思想展開の到達によって、二人の中国観の形成にも一定の影響を与えたのではないかと筆者は推測している。

(12) 『国是三論』の清朝廷への批判は数年前のものより一段と激しくなったが、小楠は中国に対する好意と期待を捨てなかつた。文久元年(一八六一)に横井牛右衛門宛書簡に小楠は次の事情を知らせた。

「漢土は是迄通信無之候へ共、隣国と云ひ旧来恩義も有之國故、今般西洋同盟諸國へ使節被差立候前に先漢土に通信の使節

被遣候儀可然との内儀にて有之」(『横井小楠関係史料(一)』三三九頁)小楠の変わらぬ温かい気持ちがこの一節で感じとれるであろう。

また「沼山閑話」に「清土人近来戦法には余程熟したる由なり、陸戦等強くして西洋とも勝敗相当れる由。通商はあれども動もすれば戦になれり。英人も窮困の勢と聞こえしり。」と記している。(『横井小楠関係史料(二)』九二七頁)「清土人近来戦法には余程熟し」云々は、どの戦いを指すかよく分からない。ただ、同じく「沼山閑話」に「心徳の学なくしては、西洋列国戦争の止む可き日なし。」とあるところを考えると、抵抗側に立つ小楠の心境が感じると思う。

(13) 安政三年十二月二十一日付け村田氏寿宛書簡に「佐久間修理は既に邪教に落入たるにて相分り申候。修理は邪教を唱ふるにて之候へ共政事戦法一切西洋之道明なりと唱。聖人之道は独り易の一部のみ道理あると云承る。是彼邪教に落たるの実境なり。」と書いてある。(『横井小楠関係史料(一)』二四五頁)

(14) 中国学界においては佐久間象山、吉田松陰に関する研究が比較的多く行われる一方、小楠研究は殆どなされていないのが現状である。約百年前に、中国の学界は日本幕末期に佐久間象山、吉田松陰という思想家がいることがすでに分かった。(増田渉「日中文化関係の一面」参照 『西洋東漸と中国事情』所収三五頁 一九七九年)ところで、小楠の名前はおそらく約三〇年前ようやく中国で知られたであろう。(朱謙之 『日本の陽明学』参照 一九六二年北京三聯書店)また、一九九五年現

在、中国で小楠研究に関する公表済ものは合計訳文一、論文一だけである。小楠の中国観の紹介とそれに関する研究は、小楠研究に役に立つだけではなく、幕末儒学界の中国観の全体像を明らかにするためにも大変役に立つと思う。それが学問研究以上の意味をもつことは言うまでもないであろう。

(ちん・えいへい 筑波大学大学院哲学・思想研究科)